

創作 童話 「いてふのおうち」

中 村 楠 雄

百合子さんと鐵夫さんとは兄妹です。兄さんの鐵夫さんは、もう學校へ行つていらつしやいます。百合子さんはまだ幼稚園へ行つていらつしやいます。

お空が高くく澄みきつて、お日様がボカくと照る、暖かい或る日曜日のでありました。大變氣持ちがよいので、百合子さんと鐵夫さんとはお晝からおうちの裏のお庭で、飯事を始めました。大變面白くお遊びをして居りましたが、鐵夫さんは何時の間にか長い竹の棒で、いてふの葉をたき落しく、お靴で踏みにぢりくして面白がつて居りました。百合子さんも御馳走のお草を取り

に行つたのですけれど、また何時の間にか、いてふの葉を、一生懸命に拾つてゐました。

其の時にね、百合子さんは何だかブツくと、一人ごとを言つてゐました。よく聞いて見るとそれはこうでした。

「いてふちやん、お顔の色悪るいのね、黄色ね」

「いてふちやん、どこわるいの」

「いてふちやん、おなかすいたの」

「いてふちやん、木から落ちて痛いの」

「いてふちやん、晩に一人ではい！」

「そしたらね、あたしのおうちへ、つれて行つてあげてよ」

「あのね、あたしのお人形さんのね、お蒲團借りてあげませうよ」

そんな事を言つてゐる中に、百合子さんのお手々に、いてふの葉が一つばいにたまりました。

百合子さんは其のいてふの葉を、大切に持つて歸つて來ました。そして百合子さんが三越へ行つた時、お母さんに買つて頂いた、あの赤い、可愛い、百合子さんの一番すきなお箱の中へ、ねんねをさせてあげる事に致しました。

百合子さんは、其のお箱の中へは一番始めにお人形さんのお蒲團を敷きました。その上へいてふの葉さん達を綺麗にならべておねんねをさせました。復其の上へお人形さんのお蒲團をかけてあげました。

それから

「いてふちやん、おやすみ」

と言ひながら、お箱の蓋を致しました。

そして夜になつて、百合子さんのおねんねする時間になりました。おねんねする前に、百合子さんは、もう一度あの赤いお箱の蓋をとつて見ました。するとどうでせう。いてふちやん達は、百合子さんにおねんねさせて頂いた通りに、綺麗にお並びして、御無理を言はずに、おやすみして居りました。

「いてふちやん、おねんねしてゐるの、百合子さんもこれからおねんねするのよ。……おやすみ、また明日ね」

さう言つてから、百合子さんはお箱の蓋を致しました。そして其のいてふさんのおねんねしてゐる赤いお箱を、枕もとへ置いておやすみ致しました。

しばらくたつてから、百合子さんのお母さんがお手々へお饅頭をいくつもせて、百合子さんのお部屋へ這入つてこられました。

「百合子さん、百合子さん」

とおつしやいましたが、もうちつともお返事がありませんでした。

「おや、百合子さんはもうねむつてしまつたのねいゝ子だからお早いこと」

「おやく、百合子さんは枕もとへ、こんなお箱を置いて……何が這入つてゐるのでせう」

とおつしやりながら、蓋をスツツとおとりになりました。

「マア、いてふさんをおねんねさせてゐるのですね。それではわたしも此のいてふさんのおそばへお饅頭を入れて置ませう。百合子さんが今日は御機嫌よくお遊びしましたこれ御褒美よ」

とおつしやつて、元の通りにお蓋をして、またあちらのお部屋へいつておしまひになりました。

夜中頃になつて、

「百合子さん、百合子さん」

といつて呼び起す方があります。百合子さんはふとお眼々をあけて見ますと、枕もとに黄色いおべゝを着た、可愛い、お人形の様なお姫様がたつてゐられます」

「ハイ、あなただけーれ」
と申しますと、

「わたしね、あのいてふさんよ。お晝間大變可愛がつて下さつたので、お禮に來ましたの。そしてね、うちのお父さんもお母さんも、百合子さんに來て頂きなさいつて、言つていたわ。行きませうよ。そして皆さんと面白い事をして、お遊びませう。わたしのうちそれは面白いのよ。ね、いゝでせう。早く〜」
と申します。

それで百合子さんは、いてふさんとつれだつていてふさんのおうちの方へ行きました。町を通つて、田圃を通つて、お山の方へかゝりました。す

るといてふさんは、

「百合子さん、わたしのおうちあそびよ」

と申します。といてふさんの指さす方を見ますと大きなく、高いく、いてふの木が、百合子さんに数へられない位澤山たつてゐました。

百合子さんと、いてふさんとは、間もなく其のいてふさんの林に着きました。見ると其の脊の高いていてふの木の下に、百合子さんをつれだつて来た、いてふさんと同じ様な黄色いおべとをきた、可愛いいてふさんの子供達が、澤山お遊びをして居りました。そしてお風が吹く度に、いてふさんのお子達が皆んな一度に飛びたつて、ヒラ／＼と舞つてお遊戯をする有様は、何ともお口でいえない位ひ美事でありました。

そんな間を通つて、すん／＼向ふへ行きますとピカピカと光つた金色の御門が、見え始めました。「百合子さん、あれわたしのおうちよ」

と、いてふさんが、おつしやいます。

其のうちに其の美くしい御門について、また御玄關まで來ました。見るといてふさんの御うちもピカ／＼光つた金色の綺麗なく御うちでありました。そしてお玄關へはもういてふさんもお父さんも、お母さんも其のほか家内中の方々が皆んなお迎へに出て居られました。

お父さんが

「百合子さん、よく來てくれましたね」

お母さんも

「百合子さん、本當によく來て下さいましたこと」

とおつしやいますと、他のいてふさんの兄弟方も

「百合子さんだ、百合子さんだ」

といつて大喜びをして居ります。

それからすつと奥のお部屋へ參りますと、

「さあ、どうぞ」

といつて、百合子さんをお床間の前の、可愛いり

つばなお座ぶとんの上へ座らせました。それからまたいてふさんのお父さんとお母さんから、

「百合子さん、今日はうちの子供達を、大變可愛がつて下さつて本當に有り難う御座いました」

といつて御禮を申しました。そして

「百合子さんに御馳走をいたしませう」

と申しますと、大勢のいてふさんの御子達は

「ハイ」

と御返事をして、あちらへ行たつかと思ふと、しばらくして皆んなお膳のやうなものを捧げて、またこちらへ來ました。そしてそれを皆んな百合子さんの前へならべてしまふと、いてふさんのお父さんは

「さあ、めしあがつて下さい」

と申します。と百合子さんは、

「いただきます」

といつて、色々のおいしい御馳走を、澤山いたゞ

きました。それで百合子さんのおなが、一つばいになりましたので、

「有りがたうございました」

と申しました。さうするといてふさんのお母さんが、

「それでは百合子さん、まだゆつくりお遊びして下さいね」

と申されました。いてふさんの子達はみんなく

「百合子さんお遊び致しませう」

「百合子さんお遊戯教へて頂戴」

などと申します。それで百合子さんは、いてふさんの子供達と色々面白いことをして、長い間お遊び致しました。

其の時百合子さんは、

「アツ、わたし、本當に長い事お遊びしたわ。父さんやお母さんが御心配になつてゐるかも知ぬ。ああッわたし歸りませう」

と思ひました。

そしていてふさん達に

「わたしもう歸ります」

と申しました。さうするといふさんのお父さんと、お母さんは、

「それではまた来て下さいね、これお土産あげませう」と言つて、お饅頭を澤山下さいました。それを頂戴して大勢のいてふさん達に御門まで送つて貰つて、それから一人ですんく、おうちへ歸つて參りました。

おうちへ着いてお父さやお母さんに、

「只今歸りました」

をして、それからいてふさんのおうちへ行つたお話をしました。そして貰つて来たお饅頭を、百合子さんの好きな、あの赤いお箱へ入れました。其時、

「百合子さんく」

「百合さん早く起きませうね」

と云ふお母さんのお聲が聞えました。ハッと氣がついて見ると、百合子さんはまだおねまの中にありました。そして硝子戸へお日様が照つて、雀はチュンくと鳴いて居りました。

それで百合子さんは

「あれッ、夢かしら。本當にいてふさんの所へ行つて、お饅頭を頂いて来たやうに思つたけれど」
と思ひました。そしてまた

「あッ、昨日のいてふさんが、おねんねしてゐるか知ら」

と思つて赤いお箱の蓋をスウツととると、中にお饅頭がいくつも這入つて居りました。

百合子さんはびつくりした様に、飛びあがつて「本當よく」

と叫んで大喜びを致しました。

(大正二五、十一、二七)